

大覚寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査(7)

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

1984年に開始した発掘調査も、本年度が最終年度となった。いよいよ来年度から造水の復原整備工事に着手するにあたり、名古曾滝東南方の未調査区の成果がどうしても必要となり、このたび約172m²の調査を設けて発掘調査を実施した。また、本年度から大沢池北岸の丸太杭打直し工事を開始することとなったため、これに先行して天神島西岸とその対岸に約3.5m²の調査区を2ヶ所設けて事前調査を実施した。

今回の調査で新たに検出した中世以前に属する主要遺構は、園池1、溝6条、井戸状の湧泉1、木製の枠1等である。名古曾滝東南方で検出した鎌倉～室町時代の石敷園池は、東西約7.5m、南北約8mの規模を持ち、2時期に分かれる。当初の池SG140Aは、調査区東西隅において部分的に検出したにとどまる。深さ約0.5～0.6mあり、底面は径約5cmの礫で化粧する。この池に対応すると思われる景石が、池の西北岸に3石青灰色粘質土の地山に据わって遺存する。SG140Aの西端中央部からは石組暗渠SD36が、またSG140Aの西南隅からは南にSD134が連続する。SD36は1984年度調査で検出した蛇行石組暗渠に連なり、SG140Aから石組暗渠への接続点に水の淨水を意図したものと思われる木組の枠SX135がある。SD36の蓋石の上には土砂の流入防止のためか、剣頭紋の軒平瓦を含む平瓦を流れの方向に沿って敷き詰めている。削平されて残存しないが、暗渠の上には築山が築かれていた可能性がある。また開渠部分に優美な曲線デザインを採用しているのは、SD36が造水のような庭園的な施設として開削されたことをうかがわせるが、目に触れない暗渠部分までわざわざ蛇行させているのは不可解である。暗渠の蛇行の曲率に比して流積がきわめて小さいため、おそらく流水土砂によって早晚つまってしまったであろう。したがって、暗渠の存続期間はきわめて短期間であった可能性がある。また、SD36開削当初は全区間開渠で、後に下流部を暗渠にして築山を造成した可能性も否定できない。SG140Bは、SG140Aが半ば埋まった状況に該当する。SG140Bの南辺を東南から西北の方向

SG140全景（西南から）

SX135・SD36（北から）

に向かって SD143が斜行して SD33に流れ込む。SG140C は SG140B の外周部に盛土を行って造成している。汀線付近に漏水防止のために黄灰色および青灰色粘土を張り付け、それより外周部を厚さ約10cmの暗灰色砂質土で整地している。池全体に10cm大の玉石をばらまいたように敷き詰め、所々に景石を補充する。水深はきわめて浅い。

天神島の西岸の調査区では、平安時代前期の土器片を多量に含む整地土が現大沢池中に向かって下り、この上面に平安時代の池中堆積土と思われる黒灰色粘質土が堆積している。したがって両調査区に挟まれた区域は、嵯峨院造営時には園池（SG01・旧大沢池）であったことが確実である。85年度調査では、嵯峨院造営当初は天神島が陸続きであったことが推定されており、今調査区の成果とともに、天神島はもともと出島状に北から大沢池へと突出した形状をなし、東西両側が入り江状に入りこんでいたことが想定される。

以上のように本年度調査の結果、中世に名古曾滝の周辺には石敷の小さな園池が造られていることが判明し、復原整備に際して新たな知見を提供することとなった。とりわけ最終期の SG140C は拳大の玉石で覆われ水深もきわめて浅く、石敷の部分全体が冠水して園池を形成するというよりも、滝の前面に州浜を造って水辺を修景するという特徴を持つ。おそらく、山岳とそこから落ちる滝、そして平地部の河原のイメージを意図したものであろう。また、SG140と同時期のものとみられる蛇行石組暗渠 SD36も注目すべき遺構である。SD36をはさんで、SG140と下流部に位置する SG32の2つの園池が並存し、SD36の上には築山が築かれていた可能性が高い。水面と山と滝とが織りなす景観は、きわめて変化に富んだものであったに違いない。これらの遺構は、出土遺物から判断して13~14世紀に後宇多法皇によって造営された「中御所」に伴うものである。

（本中 真）

大覚寺・大沢池調査遺構図

天神島西岸調査地位置図